



『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編編纂共同研究 琉球を五感で調べる

富澤 達三
(非文字資料研究センター 研究協力者)

はじめに

2013年3月28～31日まで、『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編編纂共同研究（以下、「奄美・沖縄絵引研究班」）の調査として、得能壽美氏（法政大学沖縄文化研究所）・本村育恵氏（青山学院大学大学院）とともに、沖縄県那覇市周辺を訪れた。琉球地域をフィールドとし、沖縄本島にも明るい得能・本村の両氏と異なり、私にとって初の沖縄本島訪問である。

1. 近世の画像資料

近世社会は文書^{もんじょ}だけでなく、膨大な画像資料をも残した。江戸時代は狩野派に代表される、武士身分を持つ大名お抱えの絵師たちが、絵描きの頂点であった。彼らは伝統的な花鳥風月を描き、ときに余技として市井の風俗や町の賑わいを描くこともあった。18世紀後半になると、江戸では庶民の人気に支えられた浮世絵師が登場する。最高の浮世絵師は、90歳の生涯で膨大な作品を描き続けた葛飾北斎であろう。文人たちも嗜みとして、多くの絵を残した。教養人は花鳥風月のほか、余技で各地の風俗や自然災害のようす・大事件を描き、それらは歴史資料として活用されている。例えば菅江真澄は文字と画像で各地の風俗を記録した。村や町の好事家で絵心のある者は、噴火や大地震などの災害・一揆・異国船情報などの大事件を、素朴な、時には緻密な絵で記録している。

幕末になって、対象を即物的に写し撮ってしまう写真が登場すると、人々の視覚は大きく変化するが、それでも事物を描いて記録することは続けられた。人間の目と頭脳を通して観察され、描かれた事物は、何を省略し何を強調しているのか。「絵」や「図」を読み解き、過去を探る資料とする作業は、着実に進んでいる。

2. 調査の概要

那覇調査は3月28日午後から始まった。今回の調査

では、「奄美・沖縄絵引研究班」が読み解きを進めている「琉球交易港図」（浦添市美術館蔵）の実見が大きな目的である。まず同図で描かれた那覇港の現在を概観するため、港を一望できるガジャンピラ公園（那覇市小祿）より景観を調査した。那覇港は改修が進み、江戸期の姿からは激変している。得能氏によると、かつては現在公園のある高台から港まで抜ける坂道があったが、今は森に覆われてしまったという。

その後、波上神社・外国人墓地を巡検。沖縄県立博物館・美術館では、「琉球交易港図」と構図や描写が似る「首里那覇港図」をはじめとする那覇港を描いた屏風絵、進貢船の縮小模型を見学した。

3月29日は、沖縄県立図書館、沖縄県公文書館で調査ののち、浦添市美術館へ。同館所蔵の「琉球交易港図」と葛飾北斎の「琉球八景」の熟覧が大きな目的である。

①「琉球交易港図」

「琉球交易港図」（図1）は六曲一隻（縦120cm×横290cm）の屏風である。那覇港から首里城までを俯瞰し、交易に訪れたさまざまな船・那覇港の賑わい・港周辺の人々の暮らしが細部にわたって描かれている。この屏風は、明治19年（1886）ころ鹿児島県から赴任してきた巡查・高良八十八が土産として持ち帰ったものである。のち絵の部分だけが剥がされ、昭和62年に浦添市美術館準備室に寄贈され、修復により再び屏風となった。

博物館展示図録や書籍で見たかぎり「人物が小さく描かれ、略画風である」との先入観があったが、実物を見ると細部まで丁寧に描かれていることがわかった。

「琉球交易港図」と似た作品に、前出「首里那覇港図」（沖縄県立博物館・美術館蔵）・「琉球貿易図屏風」（滋賀大学経済学部附属史料館蔵）がある。滋賀大の作品とは、構図や細部の描写が大変似ており、中国製と推定される竹紙が使用されていることから、同じ工房で制作された可能性が指摘されている。